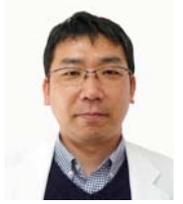


整形外科紹介

—手・肘関節外科の紹介 『生活する手』を目指して—

整形外科 医長 大坪 晋



【はじめに】

整形外科は四肢機能を回復させ、生活の質の向上を図る科です。その中でも上肢は動きの制限や痺れなどによる機能の損失が生活に直結します。また手は四肢の中でも人目につきやすく整容も重要です。

今回は私の専門分野である手・肘関節の診断・治療・リハビリにおける取り組みをご紹介します。

【診断】

まずは視診が大切です。形状のみでなく動きの制限も含め動き方を視ます。それに併行して考える疾患に対する理学所見を取ります。利き手・非利き手、仕事や趣味での手の使用状態を聞くことは、病因やリハビリの進め方に大きく関わるため重要です。

次に画像診断です。画像機器の格段の進歩により病態を画像として描出することが出来るようになってきました。例えば一般的な手関節の骨折である橈骨遠位端骨折では、関節面に損傷があればそのズレを整復することが重要です。そのためCT検査にて3D立体画像を構築し、更に手根骨を抜いて関節面を見えるようにし、術前計画を立て易くします(写真1、2)。



写真1
手関節の3D-CT
橈骨遠位端骨折、掌側転位しているのが分かる



写真2
手関節の3D-CT
手根骨を抜いて関節面の状態を把握出来る

整形外科におけるCT検査は先程の橈骨遠位端骨折のように骨を詳細に見るための検査である場合が多いのですが、濃度を変えることにより、腱の断裂の有無も判断出来るようになってきました。傷のない伸筋腱皮下断裂などにおいてその効果を発揮します(写真3)。

他にもMRI検査は、手の分野において

もその細い神経や靭帯も描出できるようになっており、診断の一助となっています(写真4、5)。最近では超音波(エコー)も外来に取り入れ、腱の滑走を見る動態の確認や軟部腫瘍の性質の確認を診察と同時に行なっています。正確な診断に向けて様々な検査からアプローチします。

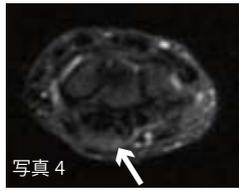


写真4
手根管中枢で正中神経は偽神経腫となっている

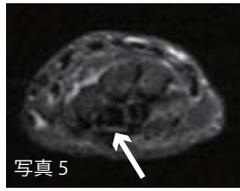


写真5
手根管部で正中神経は圧排されている

【治療】

骨折の治療ではギプスを思い浮かべる方が多いかと思いますが、そのためにギプス期間が長くなると腱や靭帯の癒着による拘縮も起こりやすいため、ギプスによる保存加療でも工夫が必要となります。骨折部位に応じてナックルキャスト(MP関節屈曲位でのDIP関節・PIP関節の屈伸運動を出来るようにしたギプス固定)や、シリンダーキャスト(肘周囲の外傷で肘の屈伸は制御し前腕回内外運動は出来るようにするギプス固定)を施行し、動かしてはいけない部位と動かして良い部位をはっきりさせ、未然に拘縮の予防に努めます。

手術を行う場合はまず麻酔が必要になります。当院では手、肘周辺の手術の場合、基本的には伝達麻酔という神経ブロックで対応しています。その利点は、体への影響が全身麻酔より少ないこと、術後はすぐに飲水や食事を開始出来、歩行も行えるため日帰り手術も可能であること、効果の長い麻酔薬を用いているた



写真3

め、術直後の疼痛を回避出来ることが挙げられます。

また全身麻酔での

手術は順番を待っていただく場合もありますが、伝達麻酔は当科で行うため可能な限り早期に行うことが出来ます。エコーを用いて伝達麻酔を行うことにより、麻酔薬を注入する針を刺す際に傷つけない神経や血管、肺なども描出し、細心の注意を払っています。

手術においてはatraumaticな手術を目指すために3.3倍のルーペを装着し、正常な組織を傷つけないように取り組んでいます。更に最近は手関節鏡(太さは1.9mm)を用いて、より正確で低侵襲な手術を行うように努めています(写真6)。



写真6：1.9mm手関節鏡

【リハビリ】

当院には作業療法士(OT)が在籍しており、手・肘疾患のリハビリに取り組んでいます。随時OTとカンファレンスを行い、医師側からは病名としては同じでも患者さんごとに手術で注意した点やリハビリとしての最終目標などを伝え、またOT側からもリハビリを行う中で感じた疑問点や患者さんからの要望等を踏まえ話し合い、現在の状況を常にお互いに把握しています。治療の場から少しずつ生活を想定し、治療を実生活に直結させることで損傷した手も『生活する手』となることを目指しています。(写真7)。

【終わりに】

手・肘疾患は日常生活に直結するため困っている方も多いのではないかと思います。週3回外来を行なっており、伝達麻酔で早期に手術対応出来ることも多く、外来リハビリも行なっております。

臨機応変に対応しておりますので些細なことでも相談いただけたら幸いです。



写真7：作業療法士と大坪医師